

オオタバコガに対する各種薬剤の効果

オオタバコガは世界に広く分布している鱗翅目ヤガ科の一種で、ワタの重要害虫として知られている。日本にも古くから生息していたが、それほど大きな問題となる害虫ではなかった。ところが、1994年の夏以降、西日本を中心に大発生するようになり、現在では、多くの作物に被害をあたえ、重要害虫化している。

成虫は、陸地から遠く離れた海上で捕獲されることがあり、移動性があると考えられている(吉松、1995)。オーストラリア、中国、インドなどでは、薬剤抵抗性系統の存在が報告されており、1994年に多発生した原因として、中国からそのような個体群が飛来した可能性が高い。

以上のように、オオタバコガは、突然に害虫化したという経緯があるため、現在のところ、登録薬剤はない。

◎コテツ、エスマルクなど有効な薬剤

そこで、全農農業研究部では、オオタバコガに対する薬剤の効果調べるため、キャベツ葉を葉液に浸漬し、3令幼虫を放飼する方法によって試験をした。

なお、供試薬剤は、オオタバコガの被害が多い作物に登録のある薬剤と、平成9年度にオオタバコガに対して日植防委託試験が実施された薬剤とした。



★トマトに食入しているオオタバコガ幼虫(1997.11.14)

その結果、図-1に示したように、コテツフロアブル、エスマルクDF、ガードジェット水和剤、アタプロン乳剤、カスケード乳剤、アフファーム乳剤に高い効果が認められた。

有機りん剤のオルトラン水和剤、DDVP乳剤75は、常用濃度で効果が認められたが、その1/10濃度では効果が低かった。

一方、合成ピレスロイド剤のトレボン乳剤とマブリック水和剤20、クロロニコチル剤のモスピラン水溶液、IGR剤のノーモルト乳剤は、いずれも効果が低かった。



★オオタバコガ成虫(1997.11.26)

しかし、オオタバコガの薬剤防除については、つぎのような問題があり、高い効果が期待できない場合もあるため、注意を要する。

- ①幼虫は、果実などの植物組織中に潜る性質があり、薬剤がつかりにくい。
- ②中、老令幼虫には、薬剤の効果が劣る可能性がある。

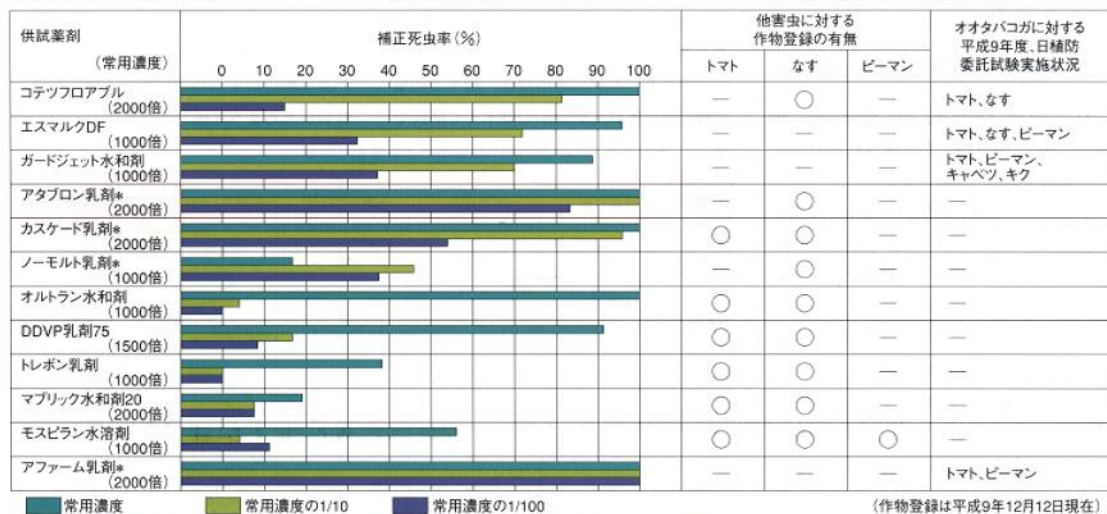
したがって、オオタバコガの防除は、薬剤だけに頼るのではなく、捕殺、ハウスの開口部の寒冷シャによる被覆、黄色蛍光灯の点灯などの物理的方法を併用する必要がある(田中、1996)。

いずれにせよ、薬剤防除が重要な手段であることにはかわりない。現在、全農農業研究部では、薬剤防除を中心に、オオタバコガ防除をさまざまな角度から検討しており、今回、効果の認められた薬剤が、実際の圃場場面でも、常にその効果を発揮できるような防除法を考えている。

◎登録薬剤と防除上の留意点

図-1に、各薬剤のトマト、なす、ピーマンへの作物登録の有無を示した。

オオタバコガに対する登録薬剤がない現在の状況では、すでに登録のある害虫と併殺というかたちでオオタバコガに対して薬剤防除をすることが望ましい。



(作物登録は平成9年12月12日現在)

図-1 各種薬剤のオオタバコガ3令幼虫に対する効果、作物登録の有無、日植防委託試験実施状況 (*:処理5日後調査、そのほかは3日後調査)